

思考力・判断力・表現力を育む「学習スキル」の開発 — 「音楽の構成要素」を知覚・感受する授業実践を通して—

Development of "Learning skill" to bring up "Thinking and judgment and expression"
— *Through class practice to perceive "component of the music", and to receive* —

田畑 八郎 *Hachiro Tabata*
(音楽学部)

I. はじめに

本研究のねらいは、音楽教育の立場から、「音楽の構成要素」を知覚・感受する授業実践を通して、思考力・判断力・表現力を育む「学習スキル」を開発することにある。この背景には、「感じる力の習得が優先され、問題の本質や解決の根拠を探り、自らの考えをまとめて表現・実践する活動につなげていない」という音楽科指導法への批判がある。

そこで本研究では、自ら実践・指導している授業や卒業研究などの指導を通して、また、関係学会等の研究論文、各大学の紀要論文等から、思考力・判断力・表現力を身に付けるための問題点と課題を抽出した。その結果、思ったり感じたりする力はある程度習得しているが、自ら考える力や、振り返って問題の本質を浮き彫りにして、どれが正しいのか、価値を判断して表現する力が不足していることが明らかになった。とりわけ、目指して学習した内容がなぜそうなったかの検証をして説明する力は、あまり身に付いていないのが現状である。

そこで、本研究では、音楽科における指導法の一例として、「音楽の構成要素」を知覚・感受させながら、思考力・判断力・表現力を育むための「学習スキル」として、次の4点を提起した。

- (1) 思考力を育む学習スキル→根拠発見学習
- (2) 判断力を育む学習スキル→価値選択学習
- (3) 言語表現力を育む学習スキル→比喩表現学習
- (4) 技能表現力を育む学習スキル→比較実演学習

これらの学習スキルの具体的な指導法については、本稿の「IV 5. 思考力・判断力・表現力を育む指導法の実際」で詳しく述べる。

II. 研究の目的

本研究の主な目的は、音楽科の授業を通して、思考力・判断力・表現力が確実に身に付く「学習スキル」を開発・提言することである。そのために、音楽の要素の特性や働きに着目し、「音楽の構成要素」を明確にし、指導と評価の一体化を図った指導計画を作成している。ここで提示する学習スキルは、単に方法論を提示するだけでなく、課題解決のた

めの仮説を立て、その検証の仕方をも提言している。つまり、思考力・判断力・表現力を習得するための手段として、音楽の構成要素が相互作用しながら知覚・感受する指導法と絡めて、課題解決に向かう仮説を立てている。そして、これらの学習スキルと仮説、指導法について、次の「Ⅲ. 研究の方法と手順」に従い、表 2 に「音楽の構成要素を知覚・感受する学習スキルと検証法」としてまとめている。

Ⅲ. 研究の方法と手順

本研究における研究の方法を要約すると以下の 4 点である。

- (1) 思考力・判断力・表現力の実態については、平素の授業研究や、関係学会等の研究論文、各大学の紀要論文等の資料分析
- (2) 音楽の構成要素の機能については、先行研究や文献研究
- (3) 思考力・判断力・表現力を習得する学習スキルとそのための学習指導案の提示は、筆者の授業実践を通じた実践研究
- (4) 学習スキルの検証法は、平素の授業実践を通じた筆者独自の研究試案の提示

また、本研究の手順は、まず、思考力・判断力・表現力の実態を掌握して、これらの力を育成する学習スキルを開発する。次に、この学習スキルを使って音楽の構成要素による仮説を立て、この仮説を①課題の把握②問題の予想③仮説の設定④根拠の発見の流れに沿って指導内容の検証を行う。そして、最後に思考力・判断力・表現力を育む学習指導案を提示する。

Ⅳ. 研究の内容

1. 思考力・判断力・表現力とは

(1) 思考力

思考力とは、何らかの事象や目標などの対象について、論理的に考えたり、直感を働かせたりして、対象となるものの意味を知ったり、意味づけを行う力をいう。思考力を身に付けるためには、思考の本質的特徴としての①状況に敏感に反応する②必ず新規な事象を含む③修正や新しいルーチン（決まりきった手順）を作り出すこと、が求められる。

音楽科教育における思考力は、「音色、リズム、速度、旋律、音の重なり（テクスチュア）、強弱、形式、構成など、音楽を形づくっている要素を正しく理解し、それらを基に知覚・感受した内容を考えること」と定義づけられる。音楽表現においては、自己の知覚データとイメージが、概念や命題と照合して妥当であるかどうかを操作しながら、音の特性の意味を探ったり、音と歌詞の関わりを考えたりすることなどが思考力を身に付けることになる。例えば、曲想を歌詞の言葉の意味や、その語感、歌詞が表す情景や心情などと関わらせて曲想を感じ取ったり、その楽曲が作られた背景や伝統的に歌い続けてきた人たちの思いなどと関わらせて感じ取ったりして、楽曲にふさわしい表現を工夫する活動が行われた

場合、音楽活動における思考力が育まれたといえる。

思考力を育成する学習スキルは、後述する「IV 5. 思考力・判断力・表現力を育む指導法の実際」の中で、「根拠発掘見学習」として提案する。(表2参照)

(2) 判断力

判断力とは、いろいろな情報を手がかりにしながら、問題の解決や課題達成の方法を選択したり、創造したりする能力のことをいう。音楽的な判断力には、瞬間的・直感的なものと、思考を伴うものがあるが、このことは、カントが、美的判断は、認識判断のように表象を悟性によって客観に關係させることをしないで、構想力と悟性とによって表象を主観の「快・不快の感情」に關係させるところに成立する、と言うように(注1)、音楽による判断力は、理性と感性を調和的に媒介するところに成り立つのである。

音楽教育においては、楽曲から知覚・感受したものについて音楽的な特徴を捉え、自分にとっての価値を判断することを音楽科における判断力と定義できる。例えば、器楽のフレーズ学習において、音のつながり方を考え、どのようなフレーズ処理が美しいかを判断したり、鑑賞用の楽曲を、背景と関わらせて実践的に演奏するとき、どのような音色の組み合わせが良いのかを自分なりに考え、価値判断するなどの活動がある。その際、音楽を形づくっている「音楽の構成要素」の知覚・感受の在り方が重要な役割を果たすことになる。

判断力を育成する学習スキルは、後述する「IV 5. 思考力・判断力・表現力を育む指導法の実際」の中で、「価値選択学習」として提案する。

(3) 表現力

表現力とは、心理的、感情的、精神的などの内面的なものを外面的、感性的形象として客観化する力のことをいう。感性的形象として客観化されたものとしては、表情、身振り、言語、記号、造形物などがある。音楽表現やものづくりにおいては、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価して工夫・改善する力も表現力に含める。音楽科における表現力には、思考・判断したことを言葉などで表す表現力(言語表現力)と、思考・判断したことを実際の音で表す表現力(技能表現力)がある。従って、音楽によって喚起されたイメージや感情など思考・判断した内容を、自分なりの言葉で言い表したり書き表したり、「音」として表現する活動に活用することを音楽科における表現力と定義できる。例えば、言語表現力としては、音楽のよさや美しさなどについて、言葉を使って他者に伝える活動などがある。また、技能表現力としては、音楽のよさや美しさなどの味わいを深め、その原理を理解して実際に音を使って演奏する活動などがこれに当たる。

表現力を育成する学習スキルは、後述する「IV 5. 思考力・判断力・表現力を育む指導法の実際」の中で、「比喩表現学習」と「比較実演学習」として提案する。

2. 思考力・判断力・表現力が問われる根拠と経緯

音楽科教育において、思考力育成に関して初めて明らかにされた研究は、1970年に出

されたマンハッタンヴィル音楽カリキュラム (Manhattanville Music Curriculum Program: MMCP) である (注 2)。MMCP は、1965 年にアメリカ 36 州において、92 の革新的・実験的音楽プログラムの調査研究を基に作成された。その調査結果には、「思考と技術の関係は、プログラムの発達の第 1 要因」、「思考や技術学習の発達は個々の生徒たちの責任を受け入れる能力によって変わった。生徒たちは、試行錯誤や予測を抱いて学ぶ機会を与えられた」と記されている。これらの声明を基に MMCP は計画され、現在の思考力・判断力・表現力を育む先行的取り組みとして重要視されている。

一方、日本国内において思考力・判断力・表現力を育成するに至った経緯は以下のとおりである。

(1) 経済協力開発機構 (通称 OECD) が実施した「生徒の学習到達度調査」(Programme for International Student Assessment、通称 PISA 調査) の読解リテラシーの順位が、2000 年調査では世界 8 位であったが、2003 年調査では 14 位へ下降する結果を呈した。この落ち込み方は参加国の中で最も大きなものであったため、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題があることが浮上した。

(2) 平成 17 年 4 月に、文部科学大臣から、中央教育審議会に対して、21 世紀を生きる子どもたちの教育の充実を図るため、教員の資質・能力の向上や教育条件の整備などと併せて、国の教育課程の基準全体の見直しについて検討するよう要請がなされ、同年 4 月から審議が開始された。

(3) この間、教育基本法の改正が行われ、小・中・高等学校・中等教育学校において、「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うこと」と明記された。(教育基本法第 30 条第 2 項)

(4) 平成 20 年 1 月に、中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申が行われ、その第 4 項に「思考力・判断力・表現力等の育成」を提示し、学習指導要領の改善の方向性が示された。

(5) 現行の学習指導要領は平成 20 年 3 月 28 日に公示されたが、その基本的な考え方として示した三つの事項のうち、第 2 項に「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること」と示された。具体的には、「思考力・判断力・表現力を育むために、観察・実験、レポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて充実させるとともに、これらの学習活動の基礎となる言語に関する能力の育成のために、小学校低・中学年の国語科において、音読・暗唱、漢字の読み書きなど基本的な力を定着させた上で、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要がある」と指摘した。(各教科等で言語活動の重視)

(6) 音楽科における学習指導要領での表記

①生徒が自己のイメージや思いを伝え合ったり、他者の意図に共感したりできるように

するなどコミュニケーションを図る指導を工夫すること。[中学校：指導計画の作成と内容の取り扱い・2（7）ア]

②「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして」[小学校：鑑賞]

③音楽を聴いて「言葉で説明するなどして」（第1学年）や、「根拠をもって批評するなどして」（第2・3学年）等、思考力を言語化に結びつけることの重要性が新たに示された。
[中学校：各学年鑑賞（1）]

3. 新学習指導要領における「音楽の構成要素」の特性・機能

小・中学校それぞれの学習指導要領の〔共通事項〕（1）アに示されている「音楽の構成要素」について、小・中学校を対応させながら、『小学校学習指導要領解説音楽編』（33頁）と『中学校学習指導要領解説音楽編』（19頁）で示されている内容を「音の相互関係」によって整理すると、表1のようにまとめることができる。本研究では、これらの音楽の構成要素を知覚・感受する方法論に着目しながら、思考力・判断力・表現力を育成する学習スキルの開発をねらっている。

表1：新学習指導要領解説における「音楽の構成要素」

音の相互関係		音楽の構成要素			
		小学校			中学校
		第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年	
1	音	音色	音色	音色	音色
2	音と音との時間的な関係	リズム 速度 拍の流れ	リズム 速度 拍の流れ	リズム 速度 拍の流れ	リズム 速度
3	音の連なり方や織りなす関係	旋律 フレーズ	旋律 フレーズ 音階や調	旋律 フレーズ 音階や調	旋律
			音の重なり	音の重なり 和声の響き 音楽の縦と横の関係	テクスチャ
4	音量の変化	強弱	強弱	強弱	強弱
5	音楽の仕組みや組み立て方				形式
		反復 問いと答え	反復 問いと答え 変化	反復 問いと答え 変化	構成

以下に本研究の「IV 4. 思考力・判断力・表現力を育む学習スキル」で引用する音楽の要素について、その特性や働きに着目して概要を述べる。

（1）音色：発音体の違いや同じ発音体でも音の出し方によって生じる音の感覚的な特性を音色という。音色は、高さや強さが同じ音でも、それに含まれる倍音や部分音の種類、

強さなどによって違いが生じる。音響学的には、音の波形の違いが音色である。音の波形は周波数成分に分解できるため、音を構成する周波数とその強度の分布の違いによって様々な音色の違いとして聞くことができる。各周波数成分のうち、最も周波数の低いものを基音、それ以外を上音と呼ぶ。すなわち、上音の構成の違いが音色の違いである。

また、上音の周波数が基音の周波数の倍数であればそれを倍音と呼ぶ。一般的に、多くの倍音を含む音は驚きや嫌悪、恐れを、高次倍音を増幅した音は怒りを暗示し、少ない低次倍音のみを含む音は喜びや悲しみの表現に結びつくと言われる。

音楽に多く使われる人声や弦楽器、管楽器の音は主に基音と倍音から成り立っている。従って倍音のそれぞれの強度の比が音色を決定すると言うことができる。逆に、意図的に人声や弦楽器、管楽器の音に倍音以外の上音を混ぜることによって、独特の音色を出すこともある。実際の音にあっては、音響学的に同じ音の高さ、同じ音の強さ、同じ音色が持続するということはあまりない。打ったりはじいたりして音を出した場合、音の出た瞬間が強くてそのあとは減衰する。実際にはそれだけでなく、音の高さや音色も特に音の出た直後に急激に変化することが分かっている。擦弦楽器や管楽器のように音を持続させるように作られた楽器であっても、音の出た瞬間には音が安定しないし、そもそも音が急速に強くなるという変化がある。

(2) テクスチャ：音と音が同じ時間軸上で垂直的にかかわったり、時間の流れの中で水平的にかかわったりして、織物の縦糸と横糸のような様相で様々な音の織りなす状態が生まれる。これをテクスチャという(注3)。実践の現場では、音程、和音、和声など、日本の音楽も含めて音が垂直的・水平的に重なっている状態(音積)を総称してテクスチャと呼んでいる。快・不快として受け入れられる音は、時代や地域によって異なるが、一般的に不協和音程は協和音程よりもネガティブで、短音程は長音程よりも鈍く弱々しく響くと判定される。調性のある音楽では、協和音の連続した流れは、安心感や安堵感をもたらす。不協和音は軽い緊張感を伴いながら安定した協和音へ進もうとする気持ちを引き起こす。音程の尺度でなく音域の広さに関しても、広い音域は狭い音域に比べてより力強さを感じさせる。また、音域の高低に関しても、高い音域の音群は低い音群よりもより喜びに満ちて力強い。調性音楽やコード進行が明確な音楽進行では、和音を解決することにより、不安定な感情の高まりを静める感覚を与えることを期待する技法に用いたりする。このように、協和音と不協和音との適度な組合せは、人の精神や感情のバランスを取り戻す作用があるとして音楽療法では重宝される。

(3) 速度(テンポ)：テンポとは通常、知覚された拍の割合のことをいう。西洋音楽においては、拍の長さ、すなわち拍節の速さのことである。一般に速度記号で表され、速度を示す言葉(速度標語)やメトロノーム記号で表される。テンポは、曲のイメージを大きく左右し、心の状態や歌う呼吸や奏でるといった身体的活動の速さをコントロールする。一般に、速いテンポは、興奮、喜び、楽しさの表現に、遅いテンポは、落ち着き、悲しみ、嫌

悪などの表現に結びつくと言われる。嬉しさや悲しさの評定は、メトロノーム的なテンポだけでなく、メトロノーム的テンポとの相互干渉の中で、音符などとの密度や他のリズム特性に強く関連している。また、テンポは、速さのだけでなく、活動内容やそのときの気持ち、年齢によっても異なり、それぞれに適応水準がある。

(4) リズム：リズムとは通常、強弱や明暗、遅速などの周期的な反復をいう。リズムは音楽の基本的要素の一つで、音の時間的な変化の構造をつくる。具体的には、時間の流れの中で一定の間隔で刻まれる連続した周期性を持つ運動のことを言い、拍節を規則的に組合せ、小節という形で区切り、時間的流れを引き伸ばしたり縮めたり、また、変化をコントロールすることで、規則正しさやそれを緩めたり、自由な動きを生み出すことができる。リズムは、アクセントが規則的に反復する拍節的リズムや、アクセントの継起が不規則な定量リズム、音の長さに一定の単位をもたない自由リズムなどに分類される。規則正しいリズムは威厳、平穩、楽しさなどを表現し、不規則なリズムは怒り、不安、恐れを表現し、変化するリズムは喜びを表現する。また、固定したリズムは威厳、力強さの表現に、滑らかなリズムは優雅な表現に結びつく。リズムは、人の呼吸、脈拍、運動など身体の生命現象や、仕事のリズム、年、月、週、日といった時間や期間の区切りなど、生活活動全てに存在している。

(5) 旋律：音楽を構成する最も基本的な要素の一つで、広義の旋律とは、高低変化を伴う一連の音が横に連なったものを指す。複数の音を同時的に縦に結合した和音や、和音の進行からなる和声とは対照的な現象といえる。旋律は、民族や時代の音感覚を反映し、風土や文化、個人の思いや思想などのメッセージ、感情などを表す。しかし、リズムや音高を欠いた音の連続は、単に抽象的な音列、又は音高線に過ぎず、音楽としての旋律は成立しない。と同時に、旋律は音楽的に、あるまとまりを示す音の連なりを指し、断片的なパッケージや自立性の乏しい副次声部などは旋律と呼ばないのが普通である。旋律の範囲が広い範囲ならば不安な表現に結びつき、狭い範囲ならば、安らかな、意気揚々とした表現に結びつく。また、上行する旋律は、緊張、下行する旋律は悲しみの表現に結びつく。さらに旋律の跳躍進行は嬉しさ、順次進行は悲しみの表現に影響を与える。このように旋律の「範囲」、「方向」、「動き」によって、緊張を緩和したり安らぎをもたらし、これに時間的な変化を加えると、緊張感を高めたり単調さが増幅されたりする。

(6) 調：調とは「音の調子」のことだが、一般的には、ある曲が特定の音階に基づいているとき、これを「調」という。そして、長音階に基づく調を長調、短音階に基づく調を短調という。広義には、音楽において、ある一つの音（主音）を中心に他の音が秩序づけられ従属的な関係をもつこと。狭義には、西洋近代音楽の長・短二種の調からなる和声的な調体系をいう。曲の全体あるいは一部に、その曲の基となる音や音階が感じられるものは「調性」を持つとい、そのような音楽を「調性音楽」という。調性音楽とは、19世紀終わり頃の「無調音楽」の登場により、それに対する概念として登場した音楽上の概念で

あり、狭義には長調または短調による機能和声に基づいた音楽を指し、広義には何らかの中心音が存在する音組織に基づいた音楽のことをいう。16 世紀のポリフォニー音楽の複雑化が、音楽技法の困難さと共に中心音を浮かび上がらせる結果となり、17 世紀の器楽曲の発展によって調性音楽が生まれることとなった。当初は、狭義の用法のみを調性音楽として旋法性は排除されていたが、現代では旋法も包括して調性音楽とする広義の用法も定着している。長調や短調、教会旋法や非西洋の民族旋法などを含め、中心音の存在する音組織のことを包括し調性と呼ぶことも多い。

調の感じ方は、文化的背景や地域性、民族によって異なるが、長調は明るく活動的、短調は寂しく悲しいというイメージがある。曲の途中で他の調に転調して、ほどよい緊張感や気分転換を味わうことができる。

(7) 強弱：強弱とは強い、弱いなど音の強さの程度をいう。音楽表現における強弱法とは、音の強弱の変化ないし対比による音楽表現をいい、「ダイナミクス」と言うこともある。その表記法は、強く、弱く、だんだん強く、だんだん弱くなどで表され、音量の多い音楽は力強さ、怒り、喜びの表現に、音量の少ない音楽は滑らかさ、悲しさ、恐れなどの表現に結びつく。また、強弱がほとんどない音楽は平穩、威厳などの表現に結びつく。20 世紀以降の西洋音楽（現代音楽）においては、これらの記号を単に「音量」を表すだけでなく、本来の意味である表現上の「強い」「弱い」を示すために使われていることが多い。このような使われ方をしている場合でも相対的な関係を示しており、音量の盛り上がり具合などの絶対的な量を示してはいない。

一方、音楽表現においては部分的に強弱法を用いるときがある。アクセントがその例で、これは、ある音を何らかの方法で目立たせることにより、その音を引き立たせることができるような変化を付けるという表現法である。場合によっては、音量よりもテヌートに近い奏法やスタッカートに近い奏法を使用することでアクセントとなることもあり得る。

(8) 音高 (ピッチ):この「音高」は、新学習指導要領の小学校、中学校とも、[共通事項]の中に音楽要素としての記述はない。しかし、他の音楽要素を語るとき、この音高との関連で論じなければならないことが多々あるため、ここでは取り上げることにした。音高 (ピッチ)とは知覚される音の高さ、もしくは音の物理的な高さ (基本周波数 [Hz]) のことをいう。音楽では、基音の周波数のような絶対的な基準に基づいた高さを、特に絶対音高と呼ぶことがある。しかし、物理的な周波数とは関係なく音の高低を感じる場合がある。例えばシンバルやトライアングル、ドラムのように、ピッチの不安定な音を取り扱う場合、音が高いか低いかは、しばしば先行する音か、あるいは後続する音かに基づいて定められる。例えば、シンバルの音は、トライアングルの後では低く、ドラムの後では高く響いて感じる。高いピッチは、興奮、怒り、活動性などの表現に結びつき、低いピッチは荘厳、退屈、威厳などの表現に結びつく。また、ピッチが大きく変化すると「驚き」に、小さく変化すると「退屈」などの表現に結びつく。

4. 思考力・判断力・表現力を育む学習スキル

スキルとは、知識や訓練を通して獲得した能力、技のことである。技術的な能力を意味する「技能」と同義であるが、本研究では技術的な能力だけではなく、楽曲の分析や解釈、音楽の構成要素の知覚・感受、音楽文化史の理解など、知識を使いこなす「技」も含めてスキルという用語を使っている。

次に思考力を育む学習スキルとして「根拠発見学習」を、判断力を育む学習スキルとして「価値選択学習」を、表現力を育む学習スキルとして「比喻表現学習」と「比較実演学習」を提案する。

(1) 根拠発見学習（思考力）

発見学習とは、教師が結論を与えるのではなく、児童・生徒自身に探求させ、自ら課題に対する解答を見出したり知識体系を発見、構築するように導く教授法を指す。児童・生徒側から見ると、知識や真理を習得する場合、発見の過程を「自らの力で経験する学習方法」と言える。発見学習は、ある分野での基本的な構造をつかませ、観察、仮説の設定と検証を通して、学習と研究の態度、推量と予測の力、自ら問題を発見して解決しようとする態度などを育てることに目的がある。この方法は、ブルナーによる教育方法の考え方で、学習者が自分で発見し、その発見によって進められる学習の仕方である。

本研究では、「根拠を発見する」という意味を含めて思考力を育成するための学習スキルとして「根拠発見学習」を提起している。そして、この学習法の基本的プロセスとして、①課題の把握②問題の予想③仮説の設定④根拠の発見⑤解決の検証の5点を設定し、「音楽の構成要素」を知覚・感受する指導法を提起する。この学習法の効果として、①知的潜在能力の増進②内発的な動機づけ③長い記憶保持④発見の仕方の学習、の四点が期待される。

以上の考え方に基づく根拠発見学習を音楽科教育の思考力の育成の学習法に援用する理由は、

- ①学習者を意図的に感情と関わらせることによって、感情面での成長も可能である。
- ②音楽活動において、ありのままの自分を出すことができると共に、音を通して他者と共感する環境を作り出すことができるため、信頼関係が築かれる。
- ③音楽は同じ楽曲を二度演奏しても、再び繰り返して同じ演奏をすることが不可能な学習活動を含むため、更なる好演奏を目指して学習を繰り返すうちに、達成動機の高まる「発見の仕方の学習」が習得できる。

(2) 価値選択学習（判断力）

価値（かち）とは、通常、ものごとの持つ目的の実現に役に立つ性質、又は重要な性質や程度を指す。何に価値があり、何に価値がないのか、一人ひとりのうちにある判断の体系を価値観という。価値観はものごとに対して下す判断であり、ものごとを決めるときの自分の基準や尺度となる。ここで取り上げた「価値選択学習」とは、目的実現のために自

ら選択した音楽美の価値の追求と他者の価値観を知り、それを尊重しながら自己の価値観と対比させて、双方の価値観を高めていく学習方法である。この学習法で大切なことは、他者の価値観を基に、自分の価値観が高められた経験を出し合わせるなどして、価値観は人の意見をよく聴き、自分の考えを深めた方がより高まることを確認することである。

一方、価値は、価値を感得する人間の存在を待って初めて存在する。また、ある人にとって価値あるものでも、他の人にとってそうではない場合もある。とはいえ、各人が何に価値を見いだすかに関して相違があるにしても、真善美といった価値そのものは、各人がそれを認めると認めないにかかわらず、客観的に存立するとみることができる。

本研究では、この価値選択学習を音楽科教育の判断力の育成の学習法に援用することを試みる。その理由は以下の2点である。

①楽曲から知覚・感受したものについて音楽的な特徴を捉え、自分にとっての価値を判断することを音楽科における判断力と定義されるためである。例えば、器楽の指導において、音色や音の積み重ねなど、音の並びや組合せの特徴を捉え、どのように演奏したらよいかを自分なりに価値判断するなどの活動がある。その際、なぜそのように演奏するのか、その理由について、根拠をもって説明できるように、音楽の構成要素を知覚することと、それらの働きを感受することとを関連付けて学習できるからである。

②音楽的な判断力は、瞬間的、直感的なもの、思考を伴うものがあるため、さまざまな種類の価値を支えている価値一般の根拠を解明するためには、「あるもの」ではなく「あるべきもの」として、絶えずあるべき価値に向かって超越していかなければならないからである。

(3) 比喩表現学習 (言語表現力)

比喩表現学習とは、ものごとの状態や様子を他のものごとに例えて強いインパクトと面白さを付加して、話の内容や記した中味のイメージをより繊細に描くことができるように、伝え方の方法を学ぶことをいう。言い換えれば、何かに例えることによって、イメージをはっきりさせ、伝える効果を期待させる表現方法とも言える。例えば、「パラソルは美しい花びらのようだった」「機関銃みたいな笑い」というような表現である。比喩の表現には以下の3種類ある。

①直喩:「~のようだ」や「~みたいだ」などを使い、例えるものと例えられるものをはっきり示す。実際の事柄とは違うが、もしそうだったらと、ある物事を引き合いに出して行う表現方法である。例:「妹は太陽みたいに明るい」

②隠喩:例えるものと例えられるものをそれとなく示す表現方法である。「~ようだ」などを使わない。例:「妹は我が家のマスコットだ」

③擬人法:人でないものを人に見立てた表現方法。例:「夏の嵐が怒りまくる」

このように比喩表現は、五感で感じたことや場の雰囲気、複雑な心情、自分で創り上げた架空の存在などを美的に表現するばかりでなく、伝えたい微妙な感覚や様々な要素が絡

み合っできる感情、独創性の溢れる創作物等を、際立てて魅力的に伝えることができる。比喩表現の足りない文学作品に、いくばくかの物足りなさを感じるように、言語表現においても、単語だけ並べたような話し方では、感情面の美しさは相手に伝わらない。

本研究では、この比喩表現学習を音楽科教育の言語表現力の育成の学習法に援用することを試みる。その理由は、以下の3点である。

- ①判断基準となる音楽の構成要素が明確に存在する。
- ②思考で生まれた価値観を判断、実演、評価し、改善すべき課題を設定できる。
- ③美的な価値判断を主観による「快・不快の感情」に関係させて説明しやすい。

(4) 比較実演学習（技能表現力）

比較実演学習とは、二つ、またはそれ以上のもの（演奏）を比べて、その異同・関係・一般法則などを研究し、どの演奏が最適かを判断して表現できるように、その方法を学ぶことをいう。比較は、自然科学で実験法と並んで、確実な知識を得るための方法とされ、すでに古代において動植物の類型的分類のために用いられ、発展した。19世紀以来、精神科学の諸分野、例えば、言語、法律、宗教、芸術などの研究にも適用され、成果を上げていく。

フェスティンガーの「社会的比較理論」によると、人は複雑な社会環境を適応的に生きていくために、自分の意見や能力を正しく評価したいという動機があり、そのために自分と意見や能力が類似した他者との比較を行うという。しかし常に類似した他者が比較対象となるわけでもない。自己を高め、自己をより望ましいものとして知覚したいという自己高揚動機が作用する場合は、自分より劣った他者が比較他者として選ばれる。自尊感情が脅威にさらされるような状況においては、自分よりも下のレベルにいる人と比較して「あの人よりは自分はまだだ」と思うことで自分を安心させるのである。また、自尊感情が高まっている場合や自己向上動機が作用する場合は、自分より優れた他者と比較を行う。このとき比較他者は自分にとって成功のモデルとなるのである。

ピアノの演奏会では、初めの音を聴いた瞬間にこの「社会的比較理論」が頭の中に飛び込んでくる。つまり、演奏者と聴き手の自分との比較が始まるのである。通常一般には、自分より優れた他者として比較を行い、比較他者は自分にとって成功のモデルとして捉える。しかし、時として自己高揚動機が作用して、ステージ上の演奏者を自分より劣った比較他者として選び、「あの人よりは自分がうまい」と思うことで自分を安心させ、対象者を下方比較する場合がある。

本研究では、この比較実演学習を音楽科教育の表現力の育成の学習法に援用することを試みる。その理由は、以下の3点である。

- ①比較演奏した対象を自分との比較、他者との比較の双方に求めることができる。
- ②比較する対象を決めて演奏すると、表現力として「活用する力」が強まる。
- ③演奏を比較することで、その異同、関係、一般法則などを発見できる。

5. 思考力・判断力・表現力を育む指導法の実際

思考力は、まず対立するいくつかのアイデアや選択肢を用意し、その中から一つの決定に収束させていくプロセスを通して課題解決の根拠を発見・構築する課程で育成される。また、判断力は、解決に際していくつかの選択肢を用意し、その中から最適な選択肢を選んで、自らの意志で一つの価値を選択する過程で育成される。更に表現力は、心理的、感情的、精神的などの内面的なものを、外面的、感性的な姿として客観化する過程で育成される。音楽科における表現力には、思考・判断したことを言葉などで表す表現力と、音楽表現の技能を生かしながら、思考・判断したことを音楽で表す表現力がある。ここでの表現力は、前者を「言語表現力」、後者を「技能表現力」として、音楽表現力を二つの表現力に分けて扱っている。

ここでは、音楽科における思考力・判断力・表現力を育む指導法の一例として、「音楽の構成要素」を知覚・感受する学習スキルとその検証法を提案する。

表 2 : 「音楽の構成要素」を知覚・感受する学習スキルと検証法

育む力	学習スキル	学習スキルの概要	要素間の相互作用による仮説	学習スキルを使って音楽の構成要素を知覚・感受する指導法とその検証
思考力	根拠発見学習	「根拠発見学習」とは、教師が結論を与えるのではなく、児童・生徒自身に探求させ、自ら課題に対する解答を見出したり、その根拠を発見・構築する学習法である。ここでは合唱や器楽活動において、ハーモニーが合わない理由の一つに「音色」があるのではないかと仮定して、これを解決する根拠をこの学習スキルを通して思考・発見する。	音色 + テクスチュア (仮説) ハーモニーが合わないのは音色が溶け合っていないのではないか。	①課題の把握：協和する合唱 ②問題の予想：不協和な和音 ③仮説の設定：音色の不揃い ④根拠の発見：揺れない声 ⑤解決の検証：録画と検聴 音色が溶け合わない理由として、声が揺れる、かすれる、裏声と表声の混在、地声が強いなどが考えられる。
判断力	価値選択学習	「価値選択学習」とは、役に立つ良い性質を自ら決定し、必要な価値を判断して選択できる方法を学ぶ学習法である。ここでは明るさ、暗さの雰囲気を区別しなければならない演奏において、リズム以外に速度が関わるのではないかと仮定して、求める雰囲気に合う速度をこの学習スキルを通して判断・選択する。	速度（テンポ） + リズム (仮説) 曲の雰囲気が暗く感じるのは速度が遅いからではないか。	①課題の把握：曲の雰囲気 ②問題の予想：曲の暗い表現 ③仮説の設定：遅いテンポ ④価値の選択：適度なテンポ ⑤解決の検証：録画と検聴 曲の雰囲気に与える速度の影響として、速いテンポは、興奮、喜び、楽しさの表現に、遅いテンポは、落ち着き、悲しみ、嫌悪などの表現に結びつくと言われる。

表 現 力	言語表現力	比喩表現学習	<p>「比喩表現学習」とは、ものごとを引き合いに出して相手側に面白さと強いインパクトを与え、その妙味を言葉で表す方法を学ぶ学習法である。ここでは音楽による喜びや怒りの表現は、調性のほかに旋律の動きが関わるのではないかと仮定して、求める雰囲気合う旋律をこの学習スキルを通して比喩的な言葉を使って表現する。</p>	<p>旋律 + 調</p> <p>(仮説) 喜びや怒りに満ちた音楽表現は調性のほかに旋律の動きが関係しているのではないかと。</p>	<p>①課題の把握：喜怒哀の表現 ②問題の予想：調性以外の要素 ③仮説の設定：旋律の動静 ④比喩の表現：例えの言語表現 ⑤解決の検証：録画と検聴</p> <p>喜怒哀楽の音楽表現に与える旋律の影響として、旋律の範囲が広いと不安な表現に、狭いと安らかな表現に、また、上行する旋律は緊張、下行する旋律は悲しみの表現に、さらに旋律の跳躍は嬉しさ、順次進行は悲しみの表現に結びつくと言われる。</p>
	技能表現力	比較実演学習	<p>「比較実演学習」とは、二つ、またはそれ以上のもの(演奏)を比べて、その異同・関係・一般法則などを研究し、どの音(演奏)が最適かを判断する方法を学ぶ学習法である。ここでは音のピッチの高低が時として異なって聞こえるのは、楽器から出される音の前後に発音される音の強弱に関係するのではないかと仮定して、求める音高に合う音をこの学習スキルを通して比較・実演する。</p>	<p>強弱 + 音高(ピッチ)</p> <p>(仮説) 音高(ピッチ)が高いか低いかは、先行する音か、後続する音に基づいて定められるのではないかと。</p>	<p>①課題の把握：協和する合奏 ②問題の予想：不協和な和音 ③仮説の設定：ピッチの不揃い ④比較・実演：前後楽器の強弱 ⑤解決の検証：録画と検聴</p> <p>音高と強弱の関係はシンバルやトライアングル、ドラムのようにピッチの不安定な音を取り扱う場合、音が高いか低いかは、しばしば先行する音か、あるいは後続する音に基づいて定められる。例えばシンバルの音はトライアングルの後では低く、ドラムの後では高く感じる。</p>

V. 思考力・判断力・表現力を育む学習指導案

第6学年音楽科学習指導案

日時：平成 年 月 日 () 第 校時
 場所： 市立 小学校 音楽室
 学級：第6学年 組男子 名 女子 名 計 名
 担当教諭： 先生 印

1. 題材名

「皆で考え判断してつくる合唱」－「音楽の構成要素」の働きを生かして合唱しよう－

2. 題材設定の理由

本題材は、思考力、判断力、表現力を育むために、新学習指導要領 音楽の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い 1 (5)」の「道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、音楽科の特質に応じて適切な指導をすること」を受け、「だれに対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする」〈道徳第2 内容 第5・6学年 2 (2)〉に着目して設定した。授業における合唱活動は、全面的に教師が指導するのではなく、グループ活動を通して、児童が自ら学び、主体的で創造的な音楽活動が展開できるように、その方法を工夫させることが大切である。ここ

では、合唱づくりのための活動を学級内で組織し、これを分担して、児童が自分の活動を選択して、役割を果たすことの意味を理解させる。

また、本題材では、合唱を楽しみながら、その喜びを味わうことをねらっているが、ここでは、自己の任務を全うするだけでなく、他のグループの要求や提案に応じたり、どのような歌い方をすることが適切かという回答を捻出する努力を払うことをもねらいとしている。そして、旋律の重なり方を皆で理解し合い、他のパートとのかかわりから自分の役割を理解し、互いに表現を高めて、ともに歌い合わせる喜びを感じさせたい。

3. 題材の目標

- (1) 各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。
- (2) 曲想の変化を感じ取りながら、同声合唱の響きを親しむ。
- (3) 合唱の表現力を身に付けるための独創的な表現技術（オリジナル・ナック）を開発する。
- (4) 思考力・判断力・表現力を育むためのグループ・班別学習を大切にして、「皆でつくる合唱」をめざす。

4. 指導内容（新学習指導要領の指導事項）

[音楽科 第3 指導計画の作成と内容の取り扱い]

- (1) 道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、音楽科の特質に応じて適切な指導をすること。〈1 (5)〉

[道徳 第2 内容 第5学年及び第6学年]

- (1) だれに対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする。〈2 (2)〉

[音楽科 A 表現領域の指導内容]

- (1) 呼吸及び発音の仕方を工夫して、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと。〈(1) ウ〉
- (2) 各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと。
〈(1) エ〉

[音楽科 共通事項の指導内容]

- (1) 音楽を形づくっている音色、リズム、速度、旋律、音の重なりや和声の響きを指導する。〈(1) ア (ア)〉
- (2) 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。〈(1) イ〉

5. 使用教材（楽曲）

「翼をください」(同声二部合唱曲) 山上路夫 作詞／村井邦彦 作曲／鶴原勇夫 編曲

フォークソング全盛の1971年に、グループ「赤い鳥」が歌ってヒットした曲である。変口長調、4分の4拍子。斉唱→同声二部の流れと共に、次第に響きの厚みを増すように編曲されており、伴奏を含めた和声の響きも変化の多い曲となっている。

6. 共通事項として扱う「音楽の構成要素」、指導計画、観点別評価規準

配 当 時 間	指 導 計 画	観 点 別 評 価 規 準		
共通事項 (本時)の設定	・ 主な指導内容 ・ 主な学習活動	ア音楽への関心・意欲・ 態度	イ音楽表現の創意工夫	ウ音楽表現の技能
第1時 (本時) ・ <u>旋律</u> ・ <u>音の重なり</u> ・ <u>リズム</u> ・ <u>強弱</u>	[主な指導内容] ・ 旋律の歌詞唱 ・ パート練習 ・ オリジナル・ナック の発表 [主な学習活動] ・ 二部合唱 ・ 母音唱法 ・ アタック唱法 [育む力] ・ 思考力、判断力、 表現力	① <u>旋律</u> の流れや曲の特徴に興味をもち、楽曲のよさを味わいながら歌おうとしている。 ②パートの役割を知り、 <u>音の重なり</u> や <u>リズム</u> 、 <u>強弱</u> に関心をもち、進んで歌おうとしている。 ③他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に進んで生かそうとしている。	① <u>旋律</u> の流れや曲の特徴を理解して、楽曲のよさを味わいながら歌う工夫をしている。 ②パートの役割を知り、 <u>音の重なり</u> や <u>リズム</u> 、 <u>強弱</u> について関心をもち、表現を工夫している。 ③他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に生かす工夫をしている。	① <u>旋律</u> の流れや曲の特徴を理解して、楽曲のよさを味わいながら歌っている。 ②パートの役割を知り、 <u>音の重なり</u> や <u>リズム</u> 、 <u>強弱</u> を理解して歌っている。 ③他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に生かして歌っている。
第2時 ・ <u>音の重なり</u> ・ <u>和声の響き</u> ・ <u>音楽の仕組み</u>	[主な指導内容] ・ パート練習 ・ 伴奏聴唱 [主な学習活動] ・ 二部合唱 [育む力] ・ 思考力、判断力、 表現力	④パートの役割を意識して、 <u>音の重なり</u> や <u>和声の響き</u> を感じ取り、それを生かした音楽表現に取り組もうとしている。 ⑤音楽の仕組みと音の重なりに興味をもち、表現を工夫して歌おうとしている。 ⑥他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に進んで生かそうとしている。	④パートの役割を意識して、 <u>音の重なり</u> や <u>和声の響き</u> を感じ取り、それを生かした音楽表現を工夫している。 ⑤音楽の仕組みと音の重なりを理解して表現を工夫している。 ⑥他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に生かす工夫をしている。	④パートの役割を理解して、 <u>音の重なり</u> や <u>和声の響き</u> を感じ取り、それを生かした音楽表現をしている。 ⑤音楽の仕組みと音の重なりを理解して歌っている。 ⑥他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に生かして歌っている。
第3時 ・ <u>音の重なり</u> ・ <u>和声の響き</u> ・ <u>強弱</u> ・ <u>速度</u>	[主な指導内容] ・ 音の重なり ・ 伴奏聴唱 [主な学習活動] ・ たたみかけ唱法 ・ 二部合唱 [育む力] ・ 思考力、判断力、 表現力	⑦ユニゾンによる斉唱に続いて、 <u>音の重なり</u> によって生み出される <u>和声の響き</u> を感じ取り、曲にふさわしい <u>強弱</u> や <u>速度</u> で表現しようとしている。 ⑧他者の演奏のよさを認め、協力して思いやりのある楽しい合唱をしようとしている。 ⑨他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に進んで生かそうとしている。	⑦ユニゾンによる斉唱に続いて、 <u>音の重なり</u> によって生み出される <u>和声の響き</u> を感じ取り、曲にふさわしい <u>強弱</u> や <u>速度</u> で表現を工夫している。 ⑧他者の演奏のよさを認め、協力して思いやりのある楽しい合唱をしようとする意図をもっている。 ⑨他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に生かす工夫をしている。	⑦ユニゾンによる斉唱に続いて、 <u>音の重なり</u> によって生み出される <u>和声の響き</u> を感じ取り、曲にふさわしい <u>強弱</u> や <u>速度</u> で表現をしている。 ⑧他者の演奏のよさを認め、協力して思いやりのある楽しい合唱を味わっている。 ⑨他者と共に <u>思考</u> ・ <u>構</u> 想し、楽曲に合う <u>価値</u> を判断して、自分たちの表現に生かして歌っている。

下線(ー)は共通事項の音楽の構成要素を、太字は思考・判断・表現のどの力を育てるのか、その文言例を示す。

7. 本時の目標

- ・音楽の構成要素の働きを考えながら、それを生かした合唱をしよう。

8. 本時の学習指導の展開 (全3時間扱い・第1時)

下線 (-) は共通事項の音楽の構成要素を、斜字太字は思考力・判断力・表現力を育てる指導法の文言例を表す。

指導内容	○学 習 活 動	□教師の働きかけ	■評価規準 [評価方法]
1. 発声練習	○息を十分に吸って、ゆっくりと発声練習をする。(マ行上行・下行音階)	□足の開き方、お腹の支え等について指示し、複式呼吸を意識させる。 □背筋を伸ばし、十分に呼吸させ、呼吸を支えていることを確認させる。	■腰の周りの筋肉を呼吸のために自由に使えているか。 [態度観察] ア-③
2. 目標の確認	○本時の目標を確認する。	音楽の構成要素の働きを考えながら、それを生かした合唱をしよう	
3. 教材曲の鑑賞	○「翼をください」の範唱 CD を聴き、曲の雰囲気や特徴をとらえる。 ○範唱の演奏を聴き、感想を発表し合う。 ○楽譜の合唱の部分についてパートの役割を考える。	□感想を学習ノートに書かせ、発表させる。 □主旋律か和音をつくる音かを判断するヒントを与える。	■曲の雰囲気を理解できたか。 [自己評価シート] ウ-③ ■主旋律、和音をつくる音など、パートの役割を言えたか。 [挙手観察] ア-②
4. 表現の工夫	○パート別に分かれ、パートリーダーを中心に練習する。 ○フレーズやリズムに気を付けて歌う。 ○どの部分のリズムや音の重なりが取れないかを話し合う。	□シンクペーションや三連符のリズム打ちを通して、正しいリズムがとれる方法を考えさせる。 □リズムや音の重なりが、正しく取れるようアドバイスする。	■リズムや音の重なりが正しく取れたか。 [演奏聴取] ウ-②
5. 合唱練習	○言葉をはっきり歌ったり、音の重なりを正しく歌うためのオリジナル・ナックを話し合う。(例) 母音唱法、くちばり唱法 アタック唱法、背伸び唱法 ○話し合いをもとに強弱を付けて全員で合唱の練習をする。	□課題解決の仮説を立て、独自の考えを提案するように指示する。 □個々の感想や意見を大切にして課題解決の検証ができるようにアドバイスする。※	■他者の意見を受け入れて練習に参加しているか。 [活動観察] ウ-③ ■皆で考えたオリジナル・ナックが活かされた合唱になっているか。 [身体反応観察] ウ-③
6. 教材曲の鑑賞	○再度範唱演奏を聴き、曲想の対照や学習の成果に気付かせる。	□旋律の流れに乗ってリズム、音の重なりを正確に取らせる。	
7. 二部合唱	○全員で二部合唱する。	□練習の成果を学習帳に記入させ、本時の目標が達成できたかを発表させる。	■「音楽の構成要素の働きを考えながら、それを生かした合唱唱になっているか。 [演奏聴取] ウ-③
8. 次時の予告	○次時は、和声の響きについてパートごとに話し合い、共通理解したことを各自の楽譜に書き入れ、パート別に練習することを伝える。		

※この仮説の立て方と検証の仕方は、本稿のIV 5. 「思考力・判断力・表現力を育む指導法の実際」を参照。

10. 活動のポイント

(1) 弱起8分休符の後の歌い出しの工夫：8分休符が歌詞の直前にある場合、フレーズの頭の歌詞が不揃いになりやすい。そこで、手拍子で4拍子を刻みながら歌い、8分休符のある小節のみ「タン・タン・タン・タタ」のリズムを刻みながら歌うと、リズム、歌詞共に揃えて歌うことができる。

(2) シンコペーションのリズムの感得：「このおおぞらに」のシンコペーションのリズムは、いきなり楽譜どおりに歌わせるのではなく、「このおおぞらに—つばさをひろ
ろげげ—」と、16分音符と8分音符に歌詞を分配して歌わせるとリズムをつかみやすい。

VI. 結論と今後の課題

本研究では、まず、今なぜ思考力・判断力・表現力が求められるのか、その理由と背景を探った。そして、どうしたら思考力・判断力・表現力を身に付けることができるのか、その指導法を探求して、具体的な学習スキルを提言した。さらに、この学習スキルが論理的に証明できるのか、仮説を立てて検証を行った。加えて、思考力・判断力・表現力の育成を強化するために、平素の授業実践の中でこれらの指導法と学習スキルが活きる学習指導案を提示した。その結果以下の結論を導き出すことができた。

1. 音楽科教育において思考力・判断力・表現力を育むには、学習指導要領の〔共通事項〕で示された音楽の要素の特性や働きを明確にし、指導と評価の一体化を図った学習スキルと指導計画を作成する必要がある。
2. 思考力・判断力・表現力を育むには、音楽の構成要素を知覚・感受する学習スキルを提示し、要素間の相互作用による仮説を立て、①課題の解決②問題の予想③仮説の設定④根拠の発見⑤解決の検証、のプロセスに乗せて指導・検証する方法が有効である。
3. 思考力は、対立するいくつかのアイデアや選択肢を用意し、その中から一つの決定に収束させていくプロセスを通して課題解決の根拠を発見・構築する課程で育成される。思考力を育む学習スキルとしては「根拠発見学習」が有効である。
4. 判断力は、解決に際していくつかの選択肢を用意し、その中から最適な選択肢を選んで、自らの意志で一つの価値を選択する過程で育成される。判断力を育む学習スキルとしては「価値選択学習」が有効である。
5. 表現力は、心理的、感情的、精神的などの内面的なものを、外面的、感性的な姿として客観化する過程で育成される。表現力を育む学習スキルとしては「比喩表現学習」と「比較実演学習」が有効である。
6. 思考力・判断力・表現力を育む学習指導案は、学習過程において音楽の構成要素を対象とする音楽的な感受を意図的・計画的に位置づけ、学習者が協同して活動する中で、評価規準や評価方法と一体化させて作成することが重要である。

本稿では、カントが言う「およそ一切の芸術に対する予備的訓練は、芸術の最高度の完

全を期する限り、諸般の指定に存するのではなくて、人文的教養と呼ばれている知的素養によって、心的諸力を開発するところにある」(注4)を研究の理念として援用した。思考力・判断力・表現力を育むために提示した4つの学習スキル(根拠発見学習、価値選択学習、比喩表現学習、比較実演学習)を授業の中でどのように具体化していくかについては、今後の課題としたい。

注・文献

注

注1. カント『判断力批判(上)』篠田英雄訳 岩波文庫 1964 P.66 から引用

注2. Manhattanville Music Curriculum Program (MMCP) については、マイクルL. マーク『音楽教育の現代化』松本ミサヲ 田畑八郎共訳 音楽之友社 1986 P.127 を参照

注3. 文部科学省『中学校学習指導要領解説』音楽編 P.19 から引用

注4. カント 同上書(上) P.341 から引用

文献

- ①中村明『比喩表現の世界』筑摩書房 2013
- ②ポール・スローン『思考力を鍛える30の週間』黒輪篤嗣訳 二見書房 2011
- ③茂木健一郎『感動する脳』PHP文庫 2009
- ④田畑八郎「音楽的情動の喚起要因と喚起手法に関する実践学的研究」-こころの知性(EQ)を育む音楽教育を志向して- 兵庫教育大学研究紀要 No.34 P.157-169 2009
- ⑤P.N. ジュスリン& J.A. スロボタ編著『音楽と感情の心理学』誠信書房 2008
- ⑥中田基昭『感受性を育む』東京大学出版会 2008
- ⑦田畑八郎『音楽表現の教育学』(第3版) -音で思考する音楽科教育- ケイ・エム・ピー 2007
- ⑧M.J. イライアス他『社会性と感情の教育』北大路書房 1999
- ⑨ハズラト・イナーヤト・ハーン『音の神秘』土取利行訳 平河出版社 1998
- ⑩Arthur P. Ciaramicoli and Katherine Ketcham: *The Power of Empathy*, A PLUME BOOK, New York 1997
- ⑪八木昭宏『知覚と認知』倍風館 1997
- ⑫マイクルL. マーク『音楽教育の現代化』松本ミサヲ 田畑八郎共訳 音楽之友社 1986
- ⑬John Dewey, *Art as Experience* (1934) A Perigree Books in New York 1980
- ⑭茅野良男『認識論入門』講談社 1973
- ⑮S・K・ランガー『感情と形式』大久保直幹他訳 太陽社 1971
- ⑯カント『判断力批判』(上) 篠田英雄訳 岩波文庫 1964
- ⑰カント『判断力批判』(下) 篠田英雄訳 岩波文庫 1964